

■(立川)烏亭焉馬(初代) (噺の会)を主催して、江戸落語を再興。狂歌・浄瑠璃・演劇史など多才だった。

うていえんば

・・・・・・1743= 江戸本所の相生町で、大工棟梁の家生まれる。本名中村英祝。通称和泉屋和助。

徳川吉宗隠居1745= 2歳 :

徳川吉宗没・1751= 8歳 :

・・・・・・1752= 9歳 :

両国に近いことから、幼時より見世物興行に親しみ、

大岡忠光没・1760=17歳 :

・・・・・・1761=18歳 :

家督を相続するのは兄であることから、恵まれた環境で気楽に大工修業、

仕事を渡り歩くうち、咄を身につけて行き、

意次側用人・1767=24歳 : 俳諧の師匠2代自在庵祇徳一門の「歳旦帳」に2句入集、

修業を終えて、幕府の普請方に出仕したとも伝えられるが、

・・・・・・1770=27歳 :

田沼意次老中1772=29歳 :

・・・・・・1777=34歳 : 初の著書「開帳富多霊宝略縁起」を刊行。

ツツ船蝦夷来 1778=35歳 : 回向院での信州善光寺阿弥陀如来の開帳に際し、平賀源内の示唆で、牛を見世物に偽縁起を作り大儲け。

源内獄中死・1779=36歳 : 浄瑠璃「伊達鏡阿国戯場」、

・・・・・・1780=37歳 : 浄瑠璃「碁太平記白石噺」を合作し、文名をあげる。

以後、見世物へ好奇心は持ち続けるも深入りは中断、

蘭学階梯・1783=40歳 : *大田南畝(蜀山人)を中心とする狂歌師と交流し始め、同年開催の宝合わせの席上で「太平楽巻物」を披露し、さわやかな弁舌を聞かせて、咄家としてデビュー、以後、落噺の口演が好評で、御大工頭を隠居し、

田沼意次失脚1786=43歳 : 新作の落噺を披講する(噺の会)を組織して開催する一方、

・・・・・・1788=45歳 : *5代市川団十郎を熱烈に景仰して、{三升連}を組織主宰し、居室を談洲楼と称し、相生町にそって流れる堅川にちなみ、立川談洲楼を名のる。{三升連}と{噺の会}を結びつけたことで、以後、不定期ながら、毎年{噺の会}が開催され、自宅でなどで月例会も開かれ、落噺口演が速やかに普及し、

ヲクスマン来日・1792=49歳 : 三升連狂歌俳諧集「御江都鰯鰯」刊行。以後、毎年正月の料亭での噺初めが年中行事となる。

松平定信引退1793=50歳 :

ポルトガル来航・1796=53歳 : 月例会では宣伝の意図もあって、佳作を選び、「喜美談語」、

昌平饗始・1797=54歳 : 「詞葉の花」、

古事記伝・1798=55歳 : *「無事志有志」と、毎年一冊刊行したが、寛政の改革で噺の会が禁じられ中断する一方、この年、歌舞伎関連職種から転身した玄人の咄家として初代三遊亭円生が登場、続いて初代三笑亭可楽が名乗りを上げる。_噺初めは、書画会・狂歌会などの名目でひそかにつづけられ、噺の会も落語家の芸を楽しむ会に変わり、

ほかにも、初代中村仲蔵・初代尾上松助ら多くの役者を声援し、狂言作者として弟子も擁し、

いざ乃来航・1804=61歳 : 鶴屋南北と「四天王撰江戸粧」を合作。5代団十郎が死去すると、6代も既に死去していたため、幼かった7代団十郎の後見役を務め、{三升連}を動員して、江戸の花に育て上げて行き、

いざ乃報復・1806=63歳 :

この間、柳亭種彦や十返舎一九らの文壇への登場も支援、

ゴロブニ拿捕 1811=68歳 : 森田座「花後日妓女風俗」で役者が焉馬に扮するほどの入り浸りようで、_市川家の衰微を嘆いて書き綴った団十郎中心の「花江都歌舞伎年代記」刊行始め、

・・・・・・1815=72歳 : _完結、日本初の演劇史となる。

伊能測量終・1816=73歳 : _制限つきながら禁令が解除された後の噺初めは三笑亭可楽・三遊亭円生ら玄人が高座に上って様変わり、

水野忠成老中1818=75歳 : 「以代美満寿」まで七部の{三升連}狂歌俳諧集を編集刊行。

・・・・・・1820=77歳 : 久しぶりに回向院での信州善光寺阿弥陀如来の開帳が行われると、見世物好きの虫が騒いで、合巻「開帳見世物語」を著し、袋入りで売り出すなどして、

英船浦賀来航1822=79歳 : 生涯相生町を離れることなく_没した。

中断していた江戸落語がふたたび盛んになる契機をつくったことで、江戸落語中興の祖といわれる。